

---

# 魅力の世界と衝動

洛煉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魅力の世界と衝動

### 【Zコード】

N3707C

### 【作者名】

洛煉

### 【あらすじ】

筆者が就職して退職するまでのノンフィクション。一人暮らしを始めたためか、精神不安定だった。自殺衝動と戦う物語。

道路に面したワンルームマンションの6階の一室。ベランダに面したガラス戸に寄りかかりながら、私は青く澄み切った空を見ていた。休日の昼下がりの出来事。

マフラーを改造したバイクが爆音を立てながら、下の道路を走り去っていく。完全に過ぎ去つて行つたと同時に、私の腹がぐうーと音を立てた。

そういうえば今日は、朝から何も食べてない。

「・・・『飯を作ろうかな』

おもむろに私は立ち上がり、台所へ向かう。流し台の下の戸を開けるとカップ麺があつた。お腹の足しになれば良いや・・・と思いつき、カップ麺を作る。はつきり言って、これを作ることさえ面倒くさい。お腹なんて減らなければいいのに、なんて思つたりする。

「はあ・・・」

溜め息だけが、口から零れる。やかんでお湯を作るので暫く沸騰するまで、時間がかかる。それまでソファーに座り、無造作につけたテレビを見るにした。

テレビの音は、ただのBGM。私は、内容なんて聞いていない。私は時計を見た。丁度、2時を指したあたりで、平日の今頃なら現地を回っている頃だらうか・・・営業の仕事をしていた。

「こんにちは。お忙しい所、すみません。私は・・・」

無意識に出た言葉は、いつもの基本営業トーク。私は、今の仕事に悩んでいた。何もかも上手くいかない。自分なりに考えて工夫してみた。でも、駄目だった。じゃあ、これならどうだ。でも・・・。

上司や先輩はただ「頑張れ」と言つ。優しい先輩たち。時には怒られることがあつたが、正論なので何も言い返せない。でも、ただ正論を突き付けられるので、心が痛かった。出来ない自分を責めた。やらない自分に鞭を打つた。でも、成果は上がらない。そのうちす

べてが虚無に感じられるようになつた。

平日の朝、私は7時に目を覚ます。いつものようにシャワーを浴びて、スーツに着替え、食事を済まし、化粧をする。家を出て15分程度の道のりを歩き、9時には出勤する。会社に着くと、上司・先輩・同僚と一緒に大きな声で明るく元気に朝の挨拶をする。それが終わつたら、出勤簿に印鑑を押して、適当な人を見つけて営業トークなどロールプレイングをする。

11時になると朝礼。一人一人、営業部全員の前で前日の成績を言う。そして、上司の話と続き、最後は係別に朝礼をする。それが終わると地図を渡され営業準備と昼飯だ。1時過ぎには、会社を車で出て、2時に現地到着。打ち合わせをして、いざ出陣。夕方5時ごろに中間報告をしに車に戻り、休憩をした後、また夜8時まで必死で地図を回る。

夜8時過ぎた頃、くたくたになつて車に戻る。それから終了報告をして、会社に帰る。会社に帰りつくと、もう夜10時を回つていることもしばしばある。それから、地図などを直したりして、夕礼と明日の準備をし、深夜0時を時計が指す頃にやつとマンションに帰り着く。帰る途中のコンビニで買つた弁当をつついて、そのままベットにバタンと沈む。一日の終了だ。平日はこれの繰り返し。

今日のようく休みの日は、部屋の掃除と1週間たまつた洗濯物を洗う。洗濯機を回している間に1週間分の食事を買出しに行く。それで大体、一日終わつてしまつ。そんな毎日。

今頃は、毎日が朦朧としていて、自分が何を考えているのかがよくわからなくなつていて。ほんの小さなことでも感情が溢れた。ドラマを見て泣いて、小説を読んでは泣いて、最後にはニュースを見て泣いた。もう何が悲しくて、涙しているのかわからなかつた。笑

「」とはどんなことだったのか忘れた。

「疲れた」

何に？ そう尋ねられてもわからない。ただ疲れた。今、理由を聞かれても自分でもよくわかつていないので「わからない」としか答えることは出来ない。自分が何を話しているのかさえ、よくわからなくなってきたから・・・  
なぜ自分が「」にいるのか？ と思つた。何もかもつまらない事に思えた。

上司の言葉が頭を過ぎつた。

「お前たちは、『ゴールが見えていない！ 目の先の成績はどじでもいい、気にすることではない。ただ、ゴールを見ていれば、必ず結果はついて来る』

本当に？ 私は、上司の言葉を信じて、ゴールを目指した。私のゴールとは、「毎日きちっと取れる営業マン」である。しかし上司には、「そのつもりだった」としか見えなかつたに違いない。

中々成績の上がらない私に、上司は怒つた。

「ゴールが見えていないだろ？ 成績を見ればわかる」

やはり、成績ではないか・・・と、その時は思つた。上司は言った。

「意識が足りない。下手な鉄砲でも数を打てば当たる。意識で行動は変わる」

私はその日から必死に、会社に報いようと現地を走り回つた。少なくとも会社がこなせと言われた最低ラインの倍はこなしてやるうと思つた。しかし結果は、訪問件数が増えた程度しか変わらなかつた。

「取れませんでした」

「だったら、先輩の技を盗め。そしたら取れるようになる」と、上司は言つた。しかし先輩は「私たちのを丸々盗んでも取れないよ。

貴方らしくしなきや」と言つた。

私らしいってなんだろう? 一晩考えた。私の取り柄って何? 真面目で一直線で、責任感が強い所? 色々考えた。そして、現地でそれを実践してみた。

結果は・・・「今日も〇件です」と先輩・上司に報告した。

「なぜ、私は取れないんでしょうか?」

先輩にすがる思いで聞いてみた。

「貴方のトークは、不自然なんだよ。自然に回覧板をお隣に渡しにいく感じで言えばいいんだよ」

そう教えられた。基本営業トークは憶えていた。それを自然に言うとは? 回覧板をお隣に渡しに行く感じって・・・私は、していふつもりなんだけどな・・・と思つても先輩が私のロールプレイングを見て言つてているのだから、不自然なのだろう。

ある男性の先輩には、同行しているときに「すべてがなつていない」と言われた。ショックだった。たくさん、本当にたくさん練習したのに、すべてを否定された感じだった。

一人で現地を回つているときは、何度も泣きそうになつた。酷い断られ方が続くと嫌でも涙が溢れる。つらいとき、悲しいとき、そういうとき私は、空を見る。どんな空でも良いのだ。上さえ見ていれば、涙は零れないから。営業の現地で泣くわけには行かない。目を腫らし、必死の形相で、訪問した暁には変な人が来たと通報されてしまつ。

どんなに精神状態がボロボロでも、最低訪問件数をこなさないと車に帰れない。先輩に報告出来ない。

そのうち訪問するのが義務的に感じられるようになつた。「どうせ断られえる」「絶対断られる」「怖い」「怒られる」「辛い」「悔しい」。

先輩には「頑張れ! 今日は絶対取れる」と言われる。苦痛で仕

方なかつた。その言葉の裏返し、「必ず取つて來い」と言われていたような気がした。當業時間が終わり車にとぼとぼ帰る。電灯もちらほらしかない真つ暗な道路。重い溜め息。車に帰りたくない。先輩に「今日〇件でした」なんて言えない。会社に帰りたくない。怖い、どうしようだけが、頭の半分を占める。

車に乗つて報告をする。会社に帰つて夕礼をする。  
「今日は0件です。」

「なんで取れなかつたの？」

優しい口調で主任は問う。私は、決まりきった言い訳を言つ。いつものことだ。そういうしかないのだ。決められた言い分を「自分の意識不足です」「自分が笑えなかつたから」「自分の・・・自分の・・・」自分のすべてを否定する。それでも主任はいつものように尋問を続ける。

「何が出来なかつたの?」「なぜ?」「どうして?」「私は言つ。『すべて私が悪いのです』と。

最後に言つ言葉は・・・「必ず明日は取つてきます」。

ある休日、私は布団を干していた。布団が落ちそうになり、私は咄嗟にベランダの手すりから体を乗り出した。下には、二車線の道路があつた。ふと魔が差した。

「」のまま、落ちてしまえば楽になれるだろ？

リアルに自分が落ちていく様子が目に浮かんだ。とても下の世界が魅力的な世界に見えた。私は、ここから逃げ出せる、と。もう苦しまなくていいんだよ、と言われている気がした。信じられない位の喜びさえ感じた。

私はここにいる。私は、しばらくしてその会社を辞めた。尤もらしい嘘について。言い訳はしたくなかった。「これはすべて自分の所為だ」と言つた。

・・・いや、違う。これは私のプライドが許さなかつたから建前で言つたのだ。無駄にプライドが私は高い。私が会社を辞めることを告げに行つた時、先輩たちに正論で責められ、引き止められた。正論で引き止められたら、何も言い返せない。もうこれ以上自分が傷つきたくなかったから、私は尤もらしい言い訳をして、嘘をついて「これはすべて自分の所為だ」と言つた。

本当は、「先輩たちの優しさが重圧だつた」「ノルマがないなんて嘘だ。すべてがノルマなのだからノルマではないのだ」「会社だから仕方ないとはい、成績を求められるのが苦痛だつた」と言いつたかった。確かに、私の忍耐と努力が足りなかつたと言えば、そうだろう。でも、私は私が可愛かった。自分に甘チャンで、これ以上自分が傷つきたくなかったから逃げ出した。

上司に「辞める」ということを宣告しに行つた日の会話はこんな感じだつたと思われる。朦朧としていたのではつきりとした記憶はないが、上司に「これから的人生も逃げ続けるのか?」と聞かれた。私は、上司を見つめたまま「はい」と答えた。

上司は「このまま我慢して続けるのと、飛び降りて死ぬのとどちらがいい?」と聞かれたので、私は迷わず「今なら飛び降りて死ねます」と答えた。現にそんな気持ちだった素直に言つたまでだ。上司はきつぱり「じゃあ、死ね」と言つた。私はこの言葉に「はい

と答えた。あまり考えてなかつたのは事実で、上司が「死ね」と言ったので、ここは素直にこの会社（ビルの8階にある）の外に出て飛び降りたつていいと思ったからそう答えたに過ぎない。飛び降りることに対して怖いなどと一片も思わなかつた。それどころか、「それもそつだな」と思つた。

上司に大きく溜め息を吐かれたあと「書類を書いて、退社しろ」と言われたので、私は退社の手続きの書類を書き、会社を辞めた。

会社を辞めた後、私はワンルームマンションを引き払い、自宅に帰つてきた。今はあのとき程の自殺願望はないが、虚無感は変わらない。まだ、何もしたくないと思つてゐる。親は、「早く再就職しろ」と急かす。

でも確実に、会社を辞めてからも焦燥感だけが募つていいくのを感じている。私は、これでいいのか？ と常に問われてゐる気がする。

「早く再就職しろ！」

という親の言葉が、「早く家にお金を入れろ。ただのプレーでいるつもりか？ 何を考えているんだ、こいつは！」と言われてゐる気がする。

どうしよう・・・どうしよう・・・それだけで、行動に移せない。割り切れない。他人とおしゃべりなんてしたくない。無理やりなら明るく振舞える。でも、怖い。怖い。怖い。働くのが怖い・・・他人が怖い・・・

私はずっと叫び続けている。

・・・・・助けて・・・・・

と。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3707c/>

---

魅力の世界と衝動

2010年10月12日14時44分発行